

こどももらごいっしよに

秋をあるく

倉橋惣三

秋がさそい出す。こどもらがさそい出す。さあ、いっしよに遊ぶころ。どこへでも、みんなのすきなところへ。

用があつてではない。名所をたずねてもない。秋晴れの快活に、じつとしていられなくて外へ出る。

健康のため、見學のため、そういうこともあるが、一歩々々そういうことを考えている譯でもない。目的に導かれなから足は軽い。利益はうしろからついてくればいい。楽しさと面白さだけが適づれである。

こどもをつれてか、こどもにつれられてか。どつちでもいい。というよりも、どつちでもある。さきになり、あとになり、そうして手をつなぐ。

その手をふりほどいて、急に馳けだしてゆく子。逃げてゆくのでないから、追いかけてなくていい。先生よりもこどもの

目は早い。きつと何かに興味を見つけたのである。そうして、先生も早くいらつしやいという。

そのとき先生がぐずぐずしてさえないなければいい。こどもたちの興味は暫くはそつとして置くことだ。折角く自分で見出して、自分流に楽しんでゐるのを、餘計なお世話かいは、お邪魔なことが多い。その代り、呼んだら、すぐ行つてやることだ。呼ばれないでも、ちようどいゝ程を見はからつて、その興味に引き入れられてやる先生は、一番氣のきいた先生である。先きに立つて興味を導き出すばかりでなく、こどもの興味にあとからついてゆくのである。さきになりあとになるといふのは、歩き方ばかりではない。

さて、どつちにせよ、こどもと共に楽しめる野の興味、町

の興味は多い。が、秋は秋である。

何につけても秋を樂しまなくてはつまらない。保育室や教室では足りないで、外へ出るのも、そこにひろがつている秋を求めてゝある。一日の春を歩いて仕舞いけり、といつたほどの季の行樂でないとしても、園外一步、草の道にも、ベーパーメントにも秋がある。

たゞ、その秋が、おとなとこどもとではちがうことがある。季節をとらえるものは詩であるが、すなわち、こどもの秋の詩と、おとなの秋の詩とに、屢々大きな違いがある。詩といふ詩人といえは大げさだが、詩人でない平凡人の、詩とならない前の平生の心もちにしても、そうであるらしい。それを、つい取りちがえたら、こどもといつしよに秋を歩いてゐることにならぬ。

詩といえは、東洋の秋の詩と西洋の秋の詩にも、同じような違いがあるようである。そういう詩によつて秋を感じさせられ來つてゐるわれ／＼にも、識らず／＼同じ違いが存しているかも知れない。詩としての美しさは、とり／＼であるうし、おとなとしては、思ひ／＼の秋思であつてよかるうが、こどもの秋は、こどもの秋らしく、正しく理解されなければならぬ。こどもといつしよに秋を歩いてゐる間、忘れても、こども以外の秋を感じてはならぬ。

空晴るゝ秋。風さわやかな秋。木の實草の實みのる秋。色の光度の強い秋。音の響きの響ける秋。野みちの草も乾い

て、春よりも一層高く鳴るこどもの靴音。道は黄金の明るさがみなぎつて、春よりも却つて朗らかなこどもの歌聲。こどもには、ちよう落の秋、ゆう愁の秋、うそ塞い秋、うすら寂しい秋は無い。
こどもといつしよに歩くわれ／＼にも。

一年中の好秋を、きようも、こどもらといつしよに、歩こう。

○再 刊

倉橋 惣 三 著

幼稚園雜草

定價一八〇圓 送料二〇圓

倉橋 惣 三 著

育ての心

定價一八〇圓 送料二〇圓

東京都文京區元町一丁目十五番地

發行所 乾 元 社